



認知症になってもありのままのままで 銀の杖30周年記念トーク

「支える杖となつて三十年」

銀の杖は荒川区にお住まいの認知症の人を支える家族の会です。発足された平成二年は、介護保険もなく何もサービスがない時代でした。デイサービスも認知症の人は通所を断られ、介護タクシーも区内に一台しかありませんでした。認知症高齢者はボケ老人、痴呆老人と呼ばれ、認知症に対する理解もありませんでした。お嫁さんや同居する娘さんが主に介護を担っており認知者家族は孤立し情報も少なくそれぞれ手探りで介護している状態でした。

「悩みや愚痴を吐き出す窓口」

介護者はオムツの取り替え、服薬、食事や入浴の世話、通院など一日息つく暇がありません。銀の杖はそんな家族介護者を繋げる場として発足しました。現在、会員は五十名程おり、介護から卒業された方もアドバイザーとして残り、悩みや心の痛みに寄り添っています。

「認知症は、誰でもかかる可能性のある脳の病気」

認知症の診断に使われる認知機能テ

ストを考案した長谷川さんも認知症になり、教師だった方や大企業の重役だった方もなります。六十五歳以上の高齢者の約十五%が認知症だといわれており、都内の認知症の人は四十一万人を超えています。六十五歳未満で発症する若年性認知症の人は、都内には約四千人います。また、認知症の早期発見は大切です。心の準備もでき、症状によっては進行を遅らせることができます。

「返老還児」

これは中国の言葉です。年を重ねて行く子どもに還っていくという意味です。認知症の方に接してみて、その方がどう生きてきたか素の部分が見えてきます。誰もが老いて死ぬまで人に迷惑をかけたくないと思つていますが、人に助けを借りないと暮らしていきません。

「ありがとうと言われて」

亡くなられる前に夫から言われて気持ちが救われた方がいました。自分がそうだった時に備えて周囲に支えられて生きる幸せに感謝できるように日々精進研鑽していかねければと代表の江口三岐子さんは仰っていました。

銀の杖の会の方たちは、痛みを知っているからこそ寄り添い共感してくれます。銀の杖30周年記念トークがあります。考え方を変えると日々の暮らしが変わり

ます。講演会に参加してみませんか。講師の中田実紀雄氏は認知症と告げられて笑顔でOKと言われたそうです。認知症を笑顔で受け入れた当事者と介護する奥様と介護福祉士の和田氏のトークです。

◇認知症になつてもありのまま

日時…2月8日(土)開演午後1時30分
場所…ゆいの森あらかわゆいの森ホール
参加費無料

定員100人(申込順)

講師…まんが日本昔ばなし元プロデューサー・中田実紀雄氏・中田満千江氏・和田行男氏

申込 江口さん TEL&FAX 3800-3346

銀の杖(荒川区認知症の人を支える家族の会)
毎月定例会を開催(介護や健康の勉強会、福祉サービスの情報提供、家族間の話し合い)
第一土曜日介護懇談会
会費 月額200円
申込・お問合せ
江口さん TEL&FAX 3800-3346

